

10. 学習障害に関する基本的な理解と支援の手立て

(1) 学習障害の概要

基本的には、全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難さを示す様々な状態を指します。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されますが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接的な原因となるものではありません。

なお、学習障害は、教育分野と医学分野でその定義が異なっていることや、限局性学習症と言われることもあることに留意が必要です。

(2) 学習障害のある幼児などに見られる行動等の特徴

学習障害により困難さを示す領域は「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」であり、このうちの一つ又は複数について著しい困難さを示す状態をいいます。つまり、様々な状態を表す包括的な用語であり、学習障害にはいろいろなタイプがあります。なお、全般的な知的発達に遅れはありません。

園においては、例えば、パズルや積み木で遊ぶことなどは得意であるが、豊かに対話したり、生活経験を言語で表現したり、質問に対して言語で的確に答えたりすることが難しい幼児、言葉での会話はとても滑らかにいきますが、絵をかくことにおいては少し苦手に思ったり、遊びの様子を見ていると四角形と名称は言えても模写ができない幼児などです。あるいは、自分の下駄箱やロッカーの位置を覚えにくく、物と物をどのような位置に置いたらよいのか理解しにくく、道具の操作などが極端に不器用だったりする幼児もいます。しっかりしているのに、特定の活動場面で、できなかつたり苦手なことがあったりするため、「こんなことがなぜできないのか」と周囲に理解されず、その原因を親のしつけの問題とされたり、本人がわざとしないなどと問題視されたりすることもあります。本人のアンバランスな状態を正しく理解することが重要です。具体的には次のような特徴が見られます。

○ 基礎的な能力に著しいアンバランスさがあること

全体的な遅れではなく、ある一部分でつまづいている状態を示します。例えば、身体をよく動かし元気に遊び回り、先生の指示も理解し、やり取りも不自由なくでき、園生活で大きな課題はないと思われている幼児が、「あ」の付く言葉集めやしりとりができない、というような状態です。このようなアンバランスさが極端な場合、就学後に学習上の困難さを示す可能性が高くなります。

言葉の言い間違いや聞き間違い、話し言葉の遅れ、しりとりができない、はさみがうまく使えない、靴の左右を間違える、2語文程度の言いまねができない、お手本を見て四角がかけない、ものを等分に分けられないなどのいずれかの様子が顕著に見られたら、保護者の気持ちにも配慮しつつ専門家等への相談を勧めることも考えられます。専門家に相談することで、アンバランスの有無やその特徴を把握することができます。

(3) 学習障害のある幼児などの抱える困難さに応じた支援の手立て

幼児は聞く、話すといった活動を通して音声言語を獲得していきます。そして、小学校入学以降はこのような音声言語の発達を前提として、読む、書くという文字言語を獲得していきます。学習障害のある幼児などは、小学校に入学してから学習上の困難が顕在化しますが、園のときから、その兆しは見られます。知的障害のある幼児などは同年齢の幼児と比べて全体的に発達が遅れているが、学習障害のある幼児などは、全体的な遅れではなく、ある部分に限って困難さを示します。

学習障害のある幼児などが、遊びや生活の中でどのような困難さを感じ、そういった困難さに応じてどのような支援の手立てがあるのかを考え、当該幼児の実態に応じた支援をしていくことが大切です。学習障害のある幼児などの困難さや困難さに応じた支援の手立てとして以下が考えられます。

①学習障害のある幼児などの抱える困難さ

幼児期における学習障害による困難さは、以下のものの一つ又は複数です。

- 話を正しく聞き取って、理解することが難しい。例えば、集団場面でその内容が聞き取れないことがある。聞き漏らしや聞き間違いがあつたり、指示の理解が難し

かったりもする。

- 伝えたいことを相手に伝わるように的確に話すことが難しい。単語を羅列したり、年齢に比べて内容的に乏しい話をしたりする。適切な速さで話すことが難しく、たどたどしかったり、言葉に詰まったり、早口だったりする。
 - 数の概念を理解することが難しい。年齢相応の数の操作（例えば、数を数えること、多少の判断、等分配分など）についての理解が難しかったりする。
- 上記以外にも、絵や図形をかく際に、年齢不相応のバランスの悪さや形が整わないなどの様子が見られます。

②困難さに応じた支援の手立て

部分的に苦手なところがあり、その苦手な部分は、他の幼児と同じようなやり方で教えられてもできない場合があるので、当該幼児の認知特性を踏まえた対応が重要です。

○話を聞く場面

これから始める活動について、分かりやすいキーワードを盛り込んだり、活動内容を分かりやすく絵、写真で示したりします。場合によっては、先生が実演して見せることも有効です。集団全体に向けて話す前に、個別に話しておくことで、学習障害のある幼児などが理解しやすくなることもあります。

○話をする場面

当該幼児が視線や身振りで伝えようとしている内容を受け止めて、「～なんだね」と言葉で返します。学習障害のある幼児などが話し始めた事柄については、「誰と行ったの?」「それで、どうなったの?」などと話す内容を深め、話を発展させるようにします。

○数を操作する場面

当番活動で具体物（例えば画用紙）を配る場面では、他の幼児と二人で分担して（一人は画用紙を持ち、他の一人が1枚ずつ配るなど）行うようにします。すごろく遊びなどの数を扱う遊びでは、先生と一緒に数を数えて、コマを進めるようにします。

学習障害に起因する困難は、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」

という場面にとどまらず、場合によっては、それらが複合化されて他の様々な困難に結び付くことがあります。例えば、位置や形を捉えることの困難により表情の変化が読み取れなかったり、話すことや聞くことをつまづきによって、ソーシャルスキルの未習得や対人関係の形成等における困難となって現れたりすることもあります。

年長になると、自分がイメージしたように絵がかけなかったり、製作ができなかったりすることにより、苦手意識が芽生え、苦手なことを避けようとする様子が見られたり、自分の行為に自信がもてなくなったりすることもあります。能力にアンバランスがあることは、できないのではなく、学び方が他の幼児と異なることや、やり方を変えれば、できることがあることを先生が理解して自己肯定感や有能感を育てるよう心掛けることが重要です。

(4) 困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開する

先生の必要な支援の下で、学習障害のある幼児などが園での遊びや生活を楽しみ、他の幼児との関わりの中で多様な体験ができるようにすることが大切です。先生の励ましや手助け、他の幼児との楽しい雰囲気との共有によって、苦手なことにも取り組むことができることでしょう。そして、先生や他の幼児と達成感や充実感を共有することにより、次の機会にも挑戦してみようという意欲もわいてきます。他の幼児と言葉を使った遊びや数遊びなどを通して、学習障害のある幼児などが言葉や数字などの苦手なことに楽しみながら親しんでいけるようにすることが大切です。

コラム カルタ遊びを通して(5歳児)

～絵やリズムの活用により、楽しみながら言葉も理解しやすくなる～

支援のポイント

全体的な遅れではなく「読む、書く」ことが苦手かもしれない幼児への支援として、当該幼児のアンバランスな状態を正しく理解して、アンバランスの有無や特徴を把握し、遊びの中で経験できるような機会をつくることが大切です。

遊びを通した体験における先生の思い

遊びを通して、「読む、書く」をI児なりに経験し、小さな成功体験を積み重ねながら自信がもてるようにしていきたい。

カルタ遊びの様子

I児は、友達と駆け回って遊び、よくしゃべり、明るくて、いつも遊びの中心にいますが、言葉遊びには参加しようとしません。先生はそのようなI児の様子に少し違和感がありました。

お正月遊びの時期になり、クラス全体でカルタ遊びを行うことにしました。クラス全体をいくつかのグループに分け、読み手は先生がして、グループごとにカルタ遊びをすることにしました。

先生は、I児のグループは、あえて行動が少しゆっくりな幼児でグループを構成しました。グループごとに座ったところで、先生はカルタのルールの説明を始めました。先生が読み札を読んでいるときは静かに集中して聞くこと、読み札と対になる絵札を見つけたら「はい」と声を出して絵札を取ること、同時に取ったときはじゃんけんで決めるなどのルールを決めました。I児は、先生の話聞いて、ルールを理解した様子でした。

先生は、I児のいるグループの近くで読み札を読みました。「犬も歩けば…」と読み、皆に分かるように『いぬ』の『い』が書かれているカードを探そうね」とか「犬の絵が描かれているカードだよ」と言って、文字だけではなく、絵でもカードを探せるように働き掛けました。「あった！」とあちこちのグループから声が上がると、I児は犬の絵を探して、カードを取ることができました。

先生は、全てのグループが「い」の絵札を取れたことを確認した後、絵札に書かれている「い」を指し、「これが『いぬ』の『い』だね」と文字を確認しました。I児は、「い」の絵札を手にして、先生に「取れた」と言って、笑顔になりました。

遊びや生活を楽しみながら体験を積み重ねることができる支援策の検討

「聞く、話す」ことが中心の園生活は、I児にとって何の不自由もありません。5歳児になると、文字が読めるようになる幼児もいます。先生は、I児も、文字を読めるだろうと思っていましたが、そうではありませんでした。「読む、書く」こと

が苦手かもしれない幼児にとって、遊びながら苦にならない程度に言葉遊びで遊ぶ中で、「自分はできた」という成功体験を積み重ねていくことが大切です。

カルタ遊びは、文字が読めない幼児には、絵を頼りに絵札を取って遊ぶことができ、文字を意識するきっかけになります。文字を理解するためには、音を正しく聞き取り、それをひらがなに置き換える力が必要です。この力を育むために、言葉遊びを取り入れることも一つの方法です。「言葉手拍子」（「りんご」と言いながら音に合わせて手を3回叩く）、「抜き言葉」（「くるま」の「る」を取ったら何？）、「替え言葉」（「むかし」の「む」を「お」に替えたら何？）などの言葉に親しむ時間を意図的に取り入れていきましょう。